世間解　第四三三号
令和六（二〇二四）年　三月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―摂取不捨　その五―

三月であります。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

摂取不捨ということをお聞かせいただいております。摂め取って捨てない。阿弥陀さまのおはたらきそのものであります。

善導大師さまは「摂取不捨　故名阿弥陀」（摂取して捨てたまはざるがゆゑに阿弥陀と名づけたてまつる。）阿弥陀さまというお名前と摂取不捨というおはたらきは全く同じであるとお教えくださるのであります。

親鸞聖人はこの摂取不捨に深いお思いを持ってお味わいくださるのであります。

この摂取不捨というお言葉の依り所は『観無量寿経』というお経さまでありました。『観経』には

無量寿仏に八万四千の相まします。一々の相におのおの八万四千の随形好あり。一々の好にまた八万四千の光明あり。一々の光明は、あまねく十方世界を照らし、念仏の衆生を摂取して捨てたまはず。

と説かれています。ご本山から出ている現代語訳では、

また、無量寿仏のお体には八万四千のすぐれたところがあり、そのそれぞれにはまた八万四千のこまかな特徴がそなわっている。さらにそのそれぞれにまた八万四千の光明があり、その一つ一つの光明はひろくすべての世界を照らして、仏を念じる人々を残らずその中に摂め取り、お捨てになることがないのである。

『観経』は阿弥陀さまやお浄土のお徳を心を鎮めて観察（はっきりと見、感得する）することを説かれたお経さまでありました。

浄土を願う仏道修行者はお経さまに書かれてある通りに修行をし、お経さまに書かれてある通りの境地に到達することを目指しました。

親鸞聖人が七高僧のお一人と仰がれた源信僧都もそのお一人でありました。

しかし真摯にお経さまの言葉と向き合い、真摯にお経さまに書かれているとおりの真実の境地を目指そうとすればするほど、その真実に背いている私が知らされる。その源信僧都さまが『観経』の「念仏の衆生を摂取して捨てたまはず。」という経説に心開かれてゆかれるのでした。

阿弥陀さまのお徳を感得しよう感得しなければならないと自分の能力の中でもがいていたけれども、阿弥陀さまは「仏を念ずる衆生を摂め取って捨てない」とおっしゃってくださっている。私が阿弥陀さまを拝見して初めて阿弥陀さまのお救いが私に届くのではない。私には阿弥陀さまのお相は見えないけれども、私が見えるか見えないかという問題ではなかった。源信僧都は『往生要集』というお書物の中で、

またかの一々の光明、あまねく十方世界の念仏の衆生を照らして、摂取して捨てたまはず。われまたかの摂取のなかにあれども、煩悩、眼を障へて、見たてまつることあたはずといへども、大悲倦むことなくして、つねにわが身を照らしたまふ。

と阿弥陀さまのお救いのおはたらきをおっしゃってくださいました。

私は見るものである。私が阿弥陀さまを拝見しなければならない。そうでなければ私に救いはない。と自身の能力と格闘していた源信僧都は『観経』の経説によって“私は阿弥陀さまに見られ照らされていたものであった”と心開かれてゆかれたのであります。私が感得できたか出来なかったかは問題ではない。『阿弥陀経』さまに阿弥陀仏というのは“いつでも”“どこでも”という意味であるとお説きくださっている。“いつでも”“どこでも”おはたらきくださっている“南無阿弥陀仏”さまは私が何か出来た引き換えにそのお救いを届けてくださるのではなかったのであります。真実になりきれない私を、阿弥陀さまという真実が願い支え包んでくださっておるのであります。摂取不捨を他所に探す必要はありません。私が「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏できていることこそが摂取不捨の中に居らせていただいていることでありました。　合掌